

## 2. 取組を進めるに当たり困難であった事例について

### A. コースワークの充実・強化

#### ⑥その他

##### 《人社系》

#### ●京都大学アジア・アフリカ地域研究研究科東南アジア地域研究専攻 「研究と実務を架橋するフィールドスクール」の事例

(具体的に何を実施し、何が困難であったのか)

現地語でグローバル社会、ローカル社会を理解できるような教材、換言すれば現地語新聞・公文書の読解や、臨地調査の過程で必須の専門用語、あるいは現地独特の知を表す概念語等を採録し、説明を付した用語集(現地⇄日本語)を、教員が編集し、フィールドスクールに提供して、参加者のその後の研究・実務の過程に役立てることを目指した。アラビア語教材開発を主にすすめたが、アジア・アフリカの諸言語を網羅することは困難であった。

(苦労したこと、困難であったことの具体的な要因は何だったのか、それにより実施内容がどのような影響を受けていたのか)

多様な地域と学問分野にまたがる地域研究では、それぞれの対象地域・専門分野によって使用する現地語・専門用語は大きく異なる。そのため研究者の数だけ用語集が必要となり、全体に共通する教材を開発することは困難であった。フィールドスクールでは、当該地域を専門とする教員が指導を担当したので、現地で直接教授することとなった。

(どのように対応し、どのような結果が得られたのか、また、その結果が望ましいものではなかった場合、あらかじめどのように対応していれば適切であったのか、どうすればより良い結果を導くことができたのか)

研究科が本プログラムと並行して実施している、若手研究者インターナショナル・トレーニング・プログラム(I T P)「地域研究のためのフィールド活用型現地語教育」と連動して、アジア・アフリカ地域研究に必要な言語習得を教授するセミナー(プラクティカル・ランゲージ・セミナー)を継続的に開催したことで、現地語教育を推進することができた。